7）小児より検出された S. pneumoniae, H. influenzae の薬剤感受性に関する検討

冨山　道夫（とみやま医院）

近年小児より検出される *S. pneumoniae, H. influenzae* の薬剤感受性に関して，PISP，PRSP（以下DRSP）や BLNAR など ABPC に対する感受性が低下した株の増加が指摘され，全国的なサーベイランスも1994年より実施されている．今回は1995年と1999年に当院を受診した小児より検出された *S. pneumoniae*（1995年30株，1999年50株），*H. influenzae*（1995年61株，1999年50株）の経口抗生物質に対する薬剤感受性検査を行い，耐性菌の動向に関する検討を行った．DRSP は1995年 PISP 9株（30%），1999年 PISP 27株，PRSP 3株計30株（60%），BLNAR は1995年13株（21%），1999年17株（34%），β－lactamase 産生 *H. influenzae* は1995年3株（5%），1999年1株（2%）検出され，DRSP，BLNAR の増加傾向がみられた．DRSP に対する抗菌力が期待される CDTR の薬剤感受性は，1995年 MIC_{50} 0.25 μg/mL，MIC_{90} 1 g/mL，1999年 MIC_{50} 0.5 μg/mL，MIC_{90} 1 μg/mL と MIC_{50}が1管上昇し，感受性株が耐性株に推移している傾向を認めた．

Ⅱ．特 別 講 演

「小児科領域における市中感染症と化学療法
―― 最近の話題――」

国立病院東京医療センター小児科
岩 田　　敏 先生

第7回新潟急性腎不全治療研究会

日　時　平成12年10月26日（木）
18：30より

会　場　有壬記念館
2階　大会議室

Ⅰ．一 般 演 題

1）Crow－Fukase 症候群に対してポリミキシン吸着・血漿交換療法を試みた一例

宇野　友康・伊藤　由美
風間順一郎・丸山　弘樹（新潟大学第二内科）
下条　文武
堅田　慎一・小林　　央（同 神経内科）
辻　　省次

46歳女性．1999年6月より顔面，下肢に浮腫が出現し，徐々に腹水貯留も認め，某院内科にて腹水除去を繰り返していた．2000年5月頃より左下肢の筋力低下に気づき，徐々に四肢筋力低下が進行したため，6月20日当院神経内科入院．ポリニューロパチー，肝脾腫，難治性腹水，無月経，甲状腺機能低下，皮膚血管腫，全身浮腫，血清 M 蛋白（IgM－λ）陽性，血清 VEGF（vaso-endothlial growth factor）高値を認め，Crow－Fukase 症候群（POEMS 症候群）と診断した．ステロイドパルス療法を開始し，左上肢の神経症状の改善を認めたが，全身浮腫，腹水貯留傾向に変化認めず，MP 療法を開始したが，効果はなお不十分であった．2000年9月5日，中心静脈カテーテルからの感染より敗血症性ショックを来し，人工呼吸器管理下においてポリミキシン吸着を行った．施行後より血圧上昇し尿量も増加した．抗生剤で感染症を十分コントロールし，原疾患に対して9月12日より血症交換を開始した．

2）当院におけるエンドトキシン吸着療法の問題点

中山　　均（白根健生病院内科）
綿貫　憲治（同 臨床工学科）
清水　孝王・福田　喜一（同　外科）

当院では昨年一年間に7例の敗血症性ショック，感染による SIRS，に対してエンドトキシン吸着（PMX）を施行し，6例救命できた．エンドトキシン吸着後は血